

第30期社会教育委員会議 報告書

地域でできる子どもに向けた支援

第30期（平成27年6月1日～平成29年5月31日）

富士見市社会教育委員

No.	氏名	所属
1	本間 雄一	地域子ども教室コーディネーター
2	武田 秀規	南畑公民館だより元編集委員長
3	田尻 円	学校応援団
4	長ヶ原 美博	元学校長
5	千葉 純平	水谷東公民館元おむすび少年団
6	岩村 沢也	淑徳大学教授
7	大根田 良夫	市校長会
8	吉田 廣子	文化協会
9	搦木 道代	小学校PTA会長代理
10	小森 重紀	公募

目 次

1, はじめに	3
2, 今期協議の進め方	4
3, 会議日程	5
4, 地域で行われている活動の対象別の仕分けシートの要約 と提案	7
5, まとめ	14
6, 協議を終えての感想	15

【資料】

- ◇ 地域で行われている活動の対象別の仕分けシート

1, はじめに

かつての日本では三世代同居型の家庭が多く、親以外に多くの大人が子どもに接し、それらが全体として家庭教育を担っていた。地域の人々とのつながりも今より緊密で、人々が子どもたちを「地域の子ども」として見守り、育ててきた。そして、子どもたちも地域の年の違う子どもと接したり、幼い子どもの世話をした経験を持つなど、子育てを支える仕組みや環境があった。

しかし、都市化や核家族化など、地域とのつながりの希薄化が進んだ結果、今日では多くの地域で、子育てを助けてくれる人や子育てについて相談できる人がそばにいないという状況がみられる。

また、近年は人々のライフスタイルや意識が多様化し、子育て世代の家庭環境も大きく様変わりしている。例えば、仕事を持つ親は子育ての時間の不足に悩み、一方、専業主婦は日々の子育ての中で孤独感に悩む傾向も見られる。

本来、家庭教育は、すべての教育の出発点であり、子どもが基本的な生活習慣や生活能力、また、自立心や自制心などを身に付ける上で重要な役割を果たすものである。

上記のような家庭環境の現状を踏まえ、今後、家庭教育の支援の充実を図っていくことは重要な課題である。

このため、第30期富士見市社会教育委員会議では、「地域でできる子どもに向けた支援は何があるか」をテーマに議論を行ってきた。対象を、『学校の子ども』『地域の子ども』『親・保護者』『地域の人材』に分け、各地域で行われている活動について様々な意見交換を行ってきた。

それにより、各団体での課題に共通するキーワードや、委員ならではの提案もあった。

これまで議論してきた内容をこの報告書にまとめたので、本市の家庭教育の充実に資するものとなれば幸いである。

2, 今期協議のすすめ方

協議のための参考の一つとして、第14回富士見市民意識調査報告書にそれぞれ目を通してみた。そこから社会教育に関する項目について意見交換をしたところ、注目されたのは「貧困の問題」それに関連した「男女共同参画」が家庭教育に及ぼす影響、そして「社会教育に関する関心の低さ」であった。

さらに、市「教育に関する親子意識調査」についての教育相談室の分析報告を読み、その中で「自己肯定感」というキーワードが協議の中で浮かび上がってきた。

本市では「家庭教育支援会議」が設置されるが、家庭教育の課題として、学力の問題やしつけや非行の問題が挙げられた。いわゆる貧困家庭の影響として見られるのは、学力の差や心の強さの問題があり、それは家庭に対する地域コミュニティのサポートが薄れてきたことも一因であると考えられる。

例えば、ひとり親世帯を考えてみると、子どもが小さいうちに離婚するケースが多いようだが、その時には思慮が及ばなかった、中学・高校から大学にいたるまでの経済的な負担が次々と増してくる。こうした家庭の状況が、学力やコミュニケーション能力・情緒面などを含め、基本的な「生きる力」の低下を招いているのではないか。それは最近の大学生の様子を見ても感じられることがある。

これまで当会議においても、本市において未就学児とその家庭へのサポート事業は少なからず実施されてきているが、小中学生などに対するフォローはどうなのだろうという議論があった。

地域子ども教室事業は各小学校区で行われているが、「遊び」という面に寄っているように見られる。

まず、子どもたちの「居場所づくり」ということはあるが、その上での学習支援や、「学ぶ力」「生きる力」、自分自身で考え・動く力を養うための「居場所」をどう作っていけばよいか。そうした「居場所」があることが、子どもたちが自ら乗り越えていく力になるのではないか。

その上で、市内における「居場所づくり」の現状を把握するために意見交換をした。それをまとめたのが別表である。

3, 会議日程

第1回	<p>議題：①オリエンテーション ②正・副議長および関係役員などの選出</p> <p>日時：平成27年6月29日月曜日 午後6時～7時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第2回	<p>議題：①社会教育委員に関するオリエンテーション ②前期報告書についての説明 ③今後の社会教育委員会議の進め方について</p> <p>日時：平成27年9月16日水曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第3回	<p>議題：①今期の社会教育委員会議の取り組みについて ②生涯学習関係5委員合同研修会・新年交流会の見直しについて</p> <p>日時：平成27年10月29日木曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第4回	<p>議題：①今期の社会教育委員会議のテーマについて ②生涯学習関係5委員合同研修会・新年交流会について</p> <p>日時：平成27年11月30日月曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第5回	<p>議題：①第14回富士見市市民意識調査報告書についての意見交換 ②生涯学習関係5委員合同研修会・新年交流会について</p> <p>日時：平成28年2月15日月曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第6回	<p>議題：①社会教育関係団体への補助金交付について ②第14回富士見市市民意識調査の分析について</p> <p>日時：平成28年3月14日月曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第7回	<p>議題：今年度の会議予定と、生涯学習課の今年度の方針について</p> <p>日時：平成28年4月19日火曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第8回	<p>議題：今年度の議題および進め方について</p> <p>日時：平成28年5月20日火曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第9回	<p>議題：市内各地域で行われている活動について（子どもの居場所という視点から）</p> <p>日時：平成28年6月24日金曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>

第10回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成28年9月16日金曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第11回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成28年10月24日月曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第12回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成28年12月9日金曜日 午後6時～7時30分</p> <p>場所：みずほ台コミュニティセンター</p>
第13回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成29年2月7日火曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第14回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成29年3月16日木曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第15回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成29年4月13日木曜日 午後7時～10時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>
第16回	<p>議題：市内各地域でできる子どもに向けた支援について</p> <p>日時：平成29年5月23日火曜日 午後7時～9時</p> <p>場所：教育委員会2階 会議室</p>

4, 地域で行われている活動の対象別の仕分け

シートの要約と提案

	対 象	分 類
①	学校の子ども	P T A活動（校内活動）
		学校応援団
		地域子ども教室
		小中児童生徒の地域行事（イベント）への参加
		小中高校間でのクラブ活動交流
		家庭学習の手引きやチャレンジ学習（学校から家庭へ）
②	地域の子ども	市民団体による学習支援
		市民文化団体による伝統芸能講座
		町会の運動会やまつりなどの行事
③	親・保護者	市民団体による活動（保護者の負担軽減）
		保護者対象の学習講座・講演会
		家庭学習の手引きやチャレンジ学習（学校から家庭へ）
		就学児健診の時の「子育て講座」
④	地域の人材	親父の会
		小中高大学生間の交流（学習会）
		大学生の地域ボランティア活動
		市民団体による文化芸能教室

①学校の子ども

◇P T A活動

◇学校応援団

◇地域子ども教室

【課題】

P T Aは現役保護者から組織されるため、一年限りの場合が多く、活動が浸透しない。

一方で、学校応援団・地域子ども教室においては、現役保護者の新規加入が少なく、確保が難しい現状があり、またスタッフの高齢化も著しい。結果として、イベントのマンネリ化が懸念される。

新スタッフの確保が難しい点として、現役親世代は夫婦共働き家庭も多く、また子どもにも多岐にわたり習い事に通わせており、平日夜・土日に関わらず忙しい家庭が多い中、「役員だから…」と半ば強制的にお願いしても負担感が強く、一年でやめてしまう人や、長年やっているスタッフに圧倒されてしまう人もいる。しかしどのような形で参加しても「楽しい・有益」と思い、その後も活動に参加し続けてくれる人もいるが、自らすすんで関わる人は少数である。

【提案】

どのような組織の活動であっても、「活動内容を知ってもらう」ことが大切で、活動そのものの意義を、地道に、かつ、積極的にP Rを続けていくことが必要で、周知の方法としては単独のP Rばかりではなく、学校経由であったり、学校との連携体制を作っていくことが必要不可欠である。また学校の入学説明会など、学校を取り巻く環境を知らない保護者が集まる場面では「学校・家庭だけでなく地域で子どもを育てる」という発想の大切さを話すとともに、参加することでボランティアのつながりも豊かになるメリットは、子どもだけでなく親の立場としてもかけがえのないものになることをP Rし続けていくことが大切である。

◇小中児童生徒の地域行事（イベント）への参加

【課題】

地域には、祭り等の伝統的行事や公共機関、各種団体主催の様々なイベントが計画され催されている。それらの企画の中に、鼓笛隊や吹奏楽・合唱部等が

参加の機会を得ている。参加することにより、児童・生徒の成就感や達成感が培われている。反面、多くの地域行事が土・日曜日に開催されているため、引率する教職員への負担も増している。中には、家庭の事情（子育てや親の介護等）で、参加したくてもできない状況の教職員も多い。

最近の児童は、土・日曜日に塾や習い事、スポーツクラブ等に通うことが増加してきている。そのため、様々なイベントを企画しても、児童・生徒が集まらないという声も聞かれる。また、地域におけるコミュニケーションが不足しているため、いつ、どこで、どんなことが催されているのかわからないという声も聞かれる。

【提案】

市内の主な催し物や伝統的行事等の一覧表を作成し、市内の小・中・特別支援学校に配布し、各校の年間行事予定の中に可能なものを位置付けてもらう。

市内各校への依頼に対して、様式が様々なため、とまどうこともある。市内統一の依頼フォームを作成し、双方の事務的な手続きの簡略化を図る。あわせて、スタッフのボランティア募集等の情報発信としても活用していく。

町会等と連携し、日常的な地域コミュニケーションの構築を図る。

◇小中高校間でのクラブ活動交流

【課題】

幼・小、小・中、中・高など、学校間の連携や、指導の一貫性が求められている。例えば、クラブ活動の交流を行っている学校が多いが、進学先が複数の場合は連絡や日程等の調整に時間がかかり、担当者の負担が増している。

クラブ活動指導者にとっては、活動内容が増えるため負担感がある。

授業時間数が増えて、教員が教材研究や授業準備の時間を確保するために、活動交流を負担に感じることもある。

【提案】

学校間連携の理解を深め、年間行事計画の中に、できることを精選して位置付けていく。

例えば、クラブ活動支援員などを制度として立ち上げ、学校現場の支援を図る。

◇家庭学習の手引やチャレンジ学習（学校から家庭）

【課題】

今、学校は「確かな学力」をどの子にも身に付けさせていくために、基礎・基本の習得、思考力・判断力・表現力等の活用力、課題を主体的に探究する力などの育成に取り組んでいる。特に、基礎的な知識・技能の確実な定着には、学校の他にも家庭における学習が強く求められている。

しかし、実態としては家庭学習のとらえ方に対する保護者の温度差があり、熱心に取り組む家庭とそうでない家庭とに分かれてしまうという声がある。また、家庭の事情により、家庭学習をしようとしても落ち着いてできないという家庭環境の子もいる。

また、最近の児童・生徒は、塾や習い事で放課後や休日は多忙であるという実態がある。他方では、経済的理由で習い事をしたくてもできない現実もある。

【提案】

富士見市教育委員会作成の「チャレンジ学習」の家庭における積極的な利用、活用を呼びかける。

埼玉県教育委員会作成の「3つのめばえ」等の資料を活用した家庭教育講座等を通して、保護者への意識啓発を図り、保護者の積極的な交流を図る。

学校が「家庭学習の手引き」等を作成し、どのように家庭学習を行っていったらよいか、アイデアやヒント等の具体的な助言や支援方法について、学校通じて各家庭に示す。

②地域の子ども

◇市民団体による学習支援

◇市民文化団体による伝統芸能講座

◇町会の運動会やまつりなどの行事

【課題】

地域で支援する団体は複数あるものの、どの団体にも共通しているのが、スタッフが同じメンバーであり、新しい人が増えないことである。

スタッフの固定化が高齢化を招き、新たな人材の確保も難しくなっている現状がある。では、誰でもよいのかということにはならず、一定のスキルとレベルを維持することも大切である。さらには、団体が異なっても同じスタッフが兼任しているということもある。

参加する子どもたちも、様々な事情で時間の確保が難しくなっている。活動自体もなかなか周知されず、PRの方法も工夫しなければ、これからは難しいと思われる。そのためには、学校やPTAの協力なくしては活動していけないが、地域差や任期の関係で継続性がなかなか保てない。

市民団体による学習支援では、内容や方法は地域によって違いがあるのは仕方ないが、ある程度のアウトラインは統一しておいた方が、指導者が変わっても混乱が少ないと考えられる。

【提案】

充実した支援活動を行うためには、新たな人材発掘が必要不可欠である。地域に住んでいる元教員に声をかけ、子どもに向けた教育支援に協力してもらうことや、PTAのOB・OGに参加を求めることなど、積極的な声かけが必要である。

学習方法については、いろいろな地域の指導者が定期的に話し合い、良いところは取り入れ、改善すべき点があれば改善していけば良いと思われる。学習指導は、高学力を目標とせず、一定程度の水準と子どもの居場所という目的から外れないようにする。

市民活動団体が学校へはたらきかけ、学校の活動へ組み入れてもらう。また、子どもたちに伝統芸能を体験してもらうなど、さらに公民館運営審議会やスポーツ推進員などとも連携して活動を広げ、まず足を運んでもらうことが大切である。塾などで、それぞれの家庭により時間の使い方が違ってくるのでなかなか難しいが、PTAや育成会などとも協働で事業を行うなど、人と人がつながっていくための取り組みの工夫が必要である。また、町会への協力要請も重要である。

③親・保護者

◇市民団体による活動

◇保護者対象の学習講座や講演会

◇家庭学習の手引きやチャレンジ学習（学校から家庭へ）

◇就学児健診の時の「子育て講座」

【課題】

子どもたちが健全に育つ環境づくりのため、学校や地域において、夏休みキャンプ、宿題教室、就学前の子育て講座などが企画・実行されているが、そうした活動を引っ張るリーダーが不足し、また子どもたち自身や各家庭での認識の差から、参加する子どもたちを集めることも難しくなっている。

運営組織の担い手になった人も、負担の大きさと多忙感、安全面での不安、人間関係の複雑さなどを理由に、任期が終わると役を離れてしまい、子育て支援の意義が理解されない場合も多く、活動自体に継続性がなくなることもある。

こうして、役員任期を終えても協力してくれる一部のメンバーや地域のボランティアによって、また参加者もほぼ決まった中で行事が行われているのが現状である。

行事によっては、活動している市民団体のメンバーに「他団体への手伝いをさせられている感」が強いという意識があったり、また団体によっては、自分たちの会での活動が大事と考え、共同での行事には非協力的な気持ちをもつグループもあるようだ。

【提案】

現役の親世代は働いている人が多く、時間に余裕があり日頃からこうした事業に関わっている高齢世代とは意識の面でもギャップがある。あるいは「現役の親世代の考えを取り入れないと参加者が増えない」という意見がある。

保護者との意見交換や情報収集をするなどして、行事の内容や仕事の分担等について、企画や準備の段階から見直してみる。また、複数の団体や学校区などの地域で、共催や巡回など、協働を図る。

今後は、親自身が講座などに参加することがますます大切になる。そして、こうした活動にどのように関わり、どの程度参加協力ができるかを話し合っていくことが必要である。

④地域の人材

◇親父の会

◇小中高大学生間の交流

◇大学生の地域ボランティア活動

◇市民団体による文化芸能教室

【課題】

活動の主催運営側と、参加者と双方で、人集めに難しさを感じている。

活動の主体として、誰がリーダーとなって主導してゆくのか、というのも課題の一つである。これまで活動を担ってきた人材の高齢化があり、中高生や大学生の参画が期待されるが、地域で活動している大学生は少なく、中高生のリーダーもただ声をかけるだけでは集まりにくい。中学生以上になると、部活や友達関係などで参加しなくなる。

対象となる子どもたちの、活動に参加可能な時間をどう考慮するか。

また、参加者の安全を如何に確保し、いざというときにどう対応したらよいかという不安もある。

【提案】

まず、自身が無理なく継続して楽しむような活動にしていくことが必要である。

クラブ活動や趣味などをきっかけにして、縦割りの交流を進めて行けば、自ずと年代間の存在が把握でき、世代を超えた繋がりができる。中高生・大学生も昔からあるつながり（特に親世代だけでなく自分の少し上の年代がいるところ）には戻って来やすいと考えられる。そこから、様々な地域活動に対応して無理なく組織化ができるとよい。

運営側には、参画者募集についてフォームのひな形を作って、様々な活動団体に利用できるように整えておく。子どもたちへのPR強化として、学校に協力をお願いするのもひとつであろう。

5, まとめ

「統一的対策ではなく、内発的工夫を展開する時代」

社会教育委員の会議で見えてきたのは、三世代家族は減り、両親の共働きと、兄弟姉妹がいない一人っ子も多く、子どもの社会性が希薄になっていること、親の通勤圏が拡大して、親が地域社会との関わりを全く持たないこともあることである。家庭環境、また地域と家庭との繋がりはあまりにも多様性に富み、平均的な絵を描くのは困難である。

そのような状況を考慮すると、おそらく進むべき方向というのは、市で統一の解決策を追求するのではなく、各地域の子どもたちと親の実情に合わせて、子どもたちへの支援を地域独自で作っていくことであろう。まずは、小さな支援を隣近所の親どうし、お節介な大人たちが始めても良い。一部の大人が媒介者となって SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）で様々な支援者となつながら方法も現在では考えられる。児童館や公民館を単位として曜日毎に支援者が異なる子どもの居場所作りも良いし、学校毎の工夫があっても良い。今の時代、ちょっとしたアイデアで支援の輪を広げることが、いくらでもできるのではないだろうか。

また、地域で子どもたちを支援する必要があることを広く呼びかけ、「今は地域で子どもたちへの支援が求められている」という共通認識を広め、そして支援を始めようとする人々に対しては、場所の提供や人材・制度の紹介、ちょっとしたアドバイスなど、背中を押す仕掛けを市が作っていくことも必要であろう。

今は、「“内発的発展”の時代」である。地域毎に内発的な工夫が実践されることによって、地域独自の形で助け合いが生まれ、世代間が繋がり、子どもたちは大人の背中を見るようになり、視野と知恵が広まる。一方、大人たちにとっても、地域内で新たな居場所が生まれ、それを人生の豊かさ・楽しさと感じることができる時代である。

そのような地域社会を作るためのお手伝いをしたいと、社会教育委員である我々は常に思っている。

社会教育は、子どもたちの幸せの為のみにあるのではなく、大人の幸せの為にもあるのである。

6, 協議を終えての委員の感想

- ◇今回のまとめに携わり、改めて思う事は【地域でできる子どもに向けた支援は何があるか】と対象は子どもだったはずだか、実際に課題や提案の場面になると、【どうしたら親（保護者）を参加させる事ができるか】にシフトしていったように思えます。それだけ現代の家庭環境・経済状況は多様化しているため、子ども一人ひとりの環境が違いすぎて、必要な支援の供給が追いついていないのではないのでしょうか。全て平等に支援をすることは大変厳しい道のりだとは思いますが、どの環境の子どもを対象に活動を展開していくのか、市の取り組みに今後も大きな関心を寄せていきたいと思いました。
- ◇毎回、課題に取り組んでいると必ず出てくる問題が、後継者不足・役員の固定化・参加者不足・不公平感・周知の難しさです。これらの問題がより改善させることができるよう、市や社会教育団体の皆さんでこれからも取り組んで行ってくれることを願います。
- ◇地域で子どもの支援に関わっている方々と、会議を重ねるうち、今まで気づかなかった疑問や、現代の子どもや親の新しい考え方を学びました。しかし、いつも変わらず大切なことは、子どもを思いやる気持ち、地域パトロールや見守り、学校支援等、当り前のことを日常の中で継続していくことがとても重要であると思いました。
- ◇価値観が違ってても、同じ行事に取り組む、同じ講座を受けているときは、人はまとまると信じる。組織の人たち（住民）のニーズをくみ取りひとつひとつを大切にしながら、組織の人たち（住民）の意識を高めていく。弱者や高齢者を大切にしながら、子どもたちと一緒に活動を仕組む。時間はかかるが、ひとつひとつの積み重ねが大切である。その第一歩は、みんなが多様化を受け入れ、ギャップを認める。それぞれの組織・世代が一つにまとまることを見つけ、それを目標とする。学んだことを一人ひとりが活動・発表できる場を作り、学びを通して広がり、繋がっていききたい。支援・協力者として中・高・大学生を組織に入れ、活躍の場をつくり、若者の感性を生かす活動を企画して活動の継続につなげたい。役員の魅力は活躍感、満足感である。活動内容の簡略化・明確化と反省会等での認め合い場の設定も大事である。集うもの皆が笑顔で挨拶をしていききたい。基本であり重要なことであろう。究極は『人間関係づくり』。

【タイトル】 地域でできる子どもに向けた支援は何があるか

【テーマ】 ①家庭教育支援 ②学習支援 ③居場所

資料

地域で行われている活動の対象別の仕分け

対象	活動の現状		①~③	課題	課題分析	提案（目的含む）
	分類	内容				
学校の子ども（学校そのもの）	P T A活動（校内活動）	<ul style="list-style-type: none"> 学習環境の整備 見守り活動など 学校行事の支援 	②	<ul style="list-style-type: none"> 関わる保護者の固定化 	<ul style="list-style-type: none"> 研修をしても、役員のための参加で全会員に浸透しない。 積極的に関わろうとする人が少ない（消極的・無関心） 活動が負担と考えられている。 活動してみると楽しい、有益という声があるものの、自ら活動に関わる人は少数。 	<ul style="list-style-type: none"> 「P T Aは楽しい・ためになる」など、活動そのものの意義を積極的にPR。 挨拶など、子どもの反応を見る前に、「まずは大人から」の姿勢が必要。大人の意識を変えていくと、子どもに伝わりやすい。
	学校応援団	<ul style="list-style-type: none"> 教科教育の支援 学校環境の整備 	②	<ul style="list-style-type: none"> 人材の固定化 メンバーの高齢化 新規のメンバー加入 ボランティアスタッフの確保 敷居が高いと思われるがち 	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事と自身の仕事との両立が難しい。 高齢化とともに自身の健康に不安がある。 保護者の協力をえるのが、難しい。 学校経由での依頼だと、人が集まる傾向がある。 共働き家庭が多く、活動を負担に感じる保護者も多い。 60歳代後半の方への声掛け（前半は、まだ働いている） 平日昼間開催のため、ボランティアスタッフの確保が困難。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校で保護者の集まるときに話をする（保護者会や土曜参観等）。町会組織との連携・相互協力を。 学校経由での依頼で、最初は義務的な手伝いであっても、「楽しい」という思いができて、自らの意思で参加を希望してくれる保護者が出てきた。 見学等を通し、「知ってもらおう」ことを大事にしたい。 ボランティアの横のつながりを豊かにする。 PTAのOBへの協力要請 学校の役員と同じく、年1回保護者参加の呼びかけ。
	地域子ども教室	<ul style="list-style-type: none"> 放課後児童の子どもの居場所 	③	<ul style="list-style-type: none"> 人材の固定化 活動内容のマンネリ化 関わる役員の固定化 恒常的な開催 	<ul style="list-style-type: none"> 関心の薄さ。 コーディネーターの負担が大きい。 会議が多い。 安全面での不安。 当初は社協子ども部会等が協働の活動として認識していたため、役員が変われば必然的に活動を引き継ぐことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校との協力体制。万一の事態（事故や防犯、防災など）への対処法の研修。学校の入学説明時に「地域で子ども達を育てる」話をする。地域では多くの組織や友達等に「一緒にがんばりましょう」の声掛けをする。 活動も多くはないので、学校応援団などへ当日の補助だけでも依頼をしていくといいのでは？ 活動を「知ってもらおう」努力を行う。 ボランティアのつながりを豊かにする。
	小中児童生徒の地域行事（イベント）への参加	<ul style="list-style-type: none"> 鼓笛隊や吹奏楽、合唱部など 運動系、文化系、クラブ活動訪問体験 	②③	<ul style="list-style-type: none"> 児童、生徒および学校（教員）の負担が増す。 活動発表の場 小中高生の調整 担当教員の負担大 参加できる地域行事が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程および指導時間の確保が難しい。 活動発表の場の情報 児童生徒の土日等の活動難（習い事など） 指導者の問題（土日活動） 授業外の取組のため、担当教員の意欲に因る部分が大。一方、家庭（教員の）事情により、参加できない職員もいる。 行事そのものの回数が少ないのか、案内が届いていないのか、コミュニケーションの薄弱 	<ul style="list-style-type: none"> 学校側で年度前に地域イベントを把握して計画しておく。 イベント参加に際して、地域の主催者や保護者と連携し協力する（事前打ち合わせやリハーサルなど） 依頼フォームのひな形、市長部局との連携。 地域行事情報の発信。 活動発表の年間計画 児童生徒、保護者への計画の周知 中高の3年生の部活動終了日あたりに設定。 退職教員を活用し、現職教員の負担感を軽減させる。 部活動の顧問、または学校と地域のコミュニケーションで回数の確保はできる。
	小中高校間でのクラブ活動交流		②	<ul style="list-style-type: none"> 学校の理解が得られるか 指導教員の負担 進学校が2校に分かれる場合があり、調整に時間を要する。 	<ul style="list-style-type: none"> 相互のクラブ活動を把握し連携させる窓口を設ける。 学校側で年度当初に計画しておく。 中学校区の学区編成に関わることなので、既当校の努力にかかっている。 	<ul style="list-style-type: none"> クラブ活動支援員などを制度として立ち上げ、学校現場を支援していく。
家庭学習の手引きやチャレンジ学習（学校から家庭へ）	<ul style="list-style-type: none"> 「3つのめばえ」 5 daysチャレンジ 	①②	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の捉え方に温度差がある。 与えるだけで、できない児童へのフォローが少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の価値観も多様化し、喜ばれる場合と負担に感じられる場合に分かれる。 学習のできない子どもにどのようにフォローするのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の意識啓発を図る。 家庭教育講座などを開催し、親の交流を図る。 できなかった子へのフォローを保護者に任ずるのではなく、学校も一緒に対応する。 	

地域の子ども	市民団体による学習支援	・宿題教室など	①② ③	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導者の人材確保 ・各教室による運営の相違 ・協力員の高齢化 ・見守りスタッフの固定化 ・その場所の提供のみにとどまっているように感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導のスキルとレベルが保てるか。 ・人間関係のトラブルの防止。 ・教室の内容について、地域ごと弾力的に行う必要性。 ・地域格差がある。 ・場所の提供、指導する大学生がいても、受ける子どもによっては、遊んでしまい学習の雰囲気でなくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的は高学力獲得でなく、一定程度の水準と子どもの居場所。 ・退職教員など、人材の発掘。募集フォームの定型化。 ・地域間格差をなくすために、話し合いが必要。 ・学校の協力は不可欠であるが、より一層のPRを行っていく。 ・地域人材の発掘を既存の団体から広げる。 ・居場所の提供にはつながるが、支援を考えると必ず勉強に限らないので、多岐にわたるベテランがいるとよい。
	市民文化団体による伝統芸能講座	・地域のお囃子など	②③	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の不足。 ・教わる側の時間の確保。 ・活動を知らない ・参加できる回数が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周知の機会 ・活動の楽しさを知らない。 ・地域とのコミュニケーション不足 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財審議委員との連携。 ・クラブ活動や、総合的な学習の時間への組み込み。 ・伝統芸能の体験会の充実 ・団体から学校へのアピール強化。
	町会の運動会やまつりなどの行事（PTAや育成会としての参加も含む）	・地区体育祭やまつり、イベントなど	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をひっぱりリーダーの不足 ・主催するメンバーの不足 ・参加する子ども集めが大変。 ・PTAの協力がなく人が集まらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動への勧誘方法 ・子どもの遊ぶ集団はあるものの、ゲームに集中している。月1回などの開催を行い定着化させると、子どもにも周知されるのでは。 ・PTAの任期が1年のため、参加者が継続されない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各公民館運営審議委員やスポーツ推進員などとの連携。 ・一緒にやると楽しむ子どもが多いので、足を運ばせる努力が必要（景品など）。 ・PTAのOBの他、町会の人員を増やし、委員会や部会の設置。 ・習い事の子どもの多く、家庭ごとに問題が変わってくる。
親・保護者	市民団体による活動（保護者の負担軽減）	・夏休みキャンプやグラウンドゴルフ、宿題教室など	①② ③	<ul style="list-style-type: none"> ・活動をひっぱりリーダーの不足 ・子どもも忙しい ・保護者役員の負担が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動への勧誘方法 ・安全面での不安 ・保護者間で負担感が多く、1年任期の役員も多いため、継続性がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・団体へのお手伝い感が強いものばかりに見受けられる。現役の親世代の意見を取り入れたものでなければ、参加は少ない。
	保護者対象の学習講座・講演会	・PTAや学校主催の親向け講座	①	<ul style="list-style-type: none"> ・人（参加者）が集まらない。 ・参加者の固定化（元役員など） 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座内容の検討 ・運営主体の疲弊感 ・子育てへの意識の極化 ・土日は学校都合で開催困難、平日は参加が困難。 ・内容的にも参加してみたい意欲をかきたてるものがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講座の内容（すべての人が興味を引くものでなくても） ・広範囲の情報収集 ・共催化と会場の巡回化 ・近くの学校が共同講座をすることから始める。 ・開催時期、内容の精査 ・どのような内容なら意欲がわくのか、アンケートをとってみてもよいのでは。
	家庭学習の手引きやチャレンジ学習（学校から家庭へ）	・「3つのめばえ」 ・5daysチャレンジ	①②	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭ごとの取組みに温度差 ・子どもの勉強をみる時間がなく、いい加減になる家庭もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期休暇時に教室開放して対応 ・どこまで保護者に参加してもらおうかわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ここまでは保護者にやってもらう」ということを明示してみる。
	就学時健診の時の「子育て講座」	・入学前につけたい力 ・小学校と幼稚園、保育園と違うところ	①	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が短い ・参加している保護者は、熱心に聞いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡等に時間がとられる ・どのような保護者でも参加意欲がわくような内容ではない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・短い時間でも子育て情報を計画に入れる（親が集まる機会を捉える努力） ・連続講座として、関心のある方を中心に行い、広げていったらどうか。 ・真面目すぎる内容になっていないか、意識調査をしてみてもいいのでは？

地域の人材	親父の会	・資源回収や学校を会場としたおまつりなど	③	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者集めとリーダー育成 ・歴代のPTA会長を中心に積極的に活動をしている。 ・高齢化により参加者が減少。 ・資源回収がメインになっていて、子どもが活躍する場が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の人だけの参加。 ・小学生では参加できる内容に限りがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら無理なく楽しむ会の運営方法 ・PTAのOBの協力 ・中学生ならば活動できる場所ができるのではないか。
	小中高大学生間の交流（学習会）	・学習会、遊び（夏休みの子どもの居場所）	①～③	<ul style="list-style-type: none"> ・誰が音頭取りをするか。 ・中高生のリーダー不足 ・小学生から中学生になるときに離れる子が多い。 ・教える大学生の参加が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・きっかけづくり。人の確保。安全面での不安。 ・小学校時代の集団活動の不足 ・中学生になると、部活や友達付き合いで参加しなくなる傾向。 ・地域との交流ができていない大学生がそもそも少ないように感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域イベントでの縦割り組織化。クラブ活動交流をきっかけに。 ・子ども会育成会の充実 ・思春期を迎える中学生に対して、指導員（ジュニアリーダー）として一人ひとりが大切な存在であることを伝える必要性。 ・大学生がどのくらいいるのか把握。
	大学生の地域ボランティア活動		②③	<ul style="list-style-type: none"> ・誰がどこに呼びかけるか。 		<ul style="list-style-type: none"> ・依頼フォームのひな形を作る。
	市民団体による文化芸能教室	・盆踊り指導や生け花体験教室など	②③	<ul style="list-style-type: none"> ・周知の機会。 ・指導時間の確保。 ・興味のある保護者の促しにより子どもが参加するので、子どもが少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身が参加したいと思えるアピールになっていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが分かりやすい参加設定かどうか、学校を含めたアピールの強化。